

吉川元春館跡
きつかわもとるやかた

- 1 所在地 広島県山県郡豊平町海応寺
- 2 調査期間 第二次調査 一九九五年(平7)五月～十二月
 第二次調査補足調査 一九九六年五月～八月
- 3 発掘機関 広島県教育委員会文化課中世遺跡調査班
- 4 調査担当者 小都 隆・田邊英男・木村信幸・尾崎光伸・武知 秀樹・沢元保夫・岩本芳幸
- 5 遺跡の種類 居館跡
- 6 遺跡の年代 一六世紀後半
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(大 朝)

吉川元春館跡は広島県の北西部に所在し、日本海に注ぎ込む江の川の支流の一つである志路原川に面する段丘上に立地し、標高三七六～三八〇m、川床との比高は八～一二mである。館の西方には吉川元春の菩提寺であった海応寺跡がある。

発掘調査は中世城館遺跡保存整備事業に伴うもので、一九九四年から五ヵ年計画で実施をしている。

遺跡の範囲は、南北約一〇〇m、東西約一二〇mと推定される。

近年まで耕作地となっていたため、館内に数段の段差があり、区画については不明瞭な部分があるが、東端には石垣があり、それは門跡を挟んで北に長さ五〇m、南に二五m、高さ三mの規模である。

南端には土塁の一部が認められ、北端は段丘崖となっている。館の南東部を対象とした第一次調査では、館の南辺を区画する土塁の痕跡や館内を区画する溝や柵列が検出され、台所と考えられる掘立柱建物二棟やトイレなどを確認している。

今回の報告は、館内の南西部約一八五〇m²を中心に行なった第二次調査の成果である。調査区内で、掘立柱建物二棟(うち一棟は長屋状)や溝・石積・柵列で区画された敷地内に二棟の礎石建物を検出し、他に、作業場と考えられる竪穴住居状遺構、石段、井戸二基などを確認した。

遺物として土師質土器、中国製陶磁器(青花・青磁・白磁など)・朝鮮製褐釉陶・国産陶器(備前焼・瀬戸美濃焼など)が出土したが、土器類の九〇%以上は土師質土器である。また、溝や井戸などから多量の木製品類(漆器・曲物・折敷・箸状木製品・建築部材など)が出土している。このほか砥石などの石製品、古銭や鉄釘・小柄などの金属製品、鉄滓などがある。これらの出土遺物から本館跡は、一六世紀後半

半に営まれたものと考えられるが、特に一六世紀第四半期の遺物が多いようである。文献史料の研究から推定される時期と出土遺物の年代は概ね合致している。

墨書木札(柿経)が出土した遺構は、館中央に位置する石組井戸SE二一四である。この井戸の上部は板状の礫で蓋がされ、その間隙に粘土を詰め目張りが施されていた。井戸の内径は上端部が〇・七五m、下端部〇・五五mで、深さは二・七五mである。井戸内は蓋石のため空洞になっており、底部には井筒はなく、四〇cmの堆積土が認められただけであった。堆積土中からは、八点の柿経のほか、土師質土器、木製品類などが出土している。柿経はいずれも縦方向に半分に割られており、完存するものはなく、上部あるいは下部が焼け焦げたものもある。これらのことから、この井戸で何らかの呪術的儀式が行なわれたことが考えられる。

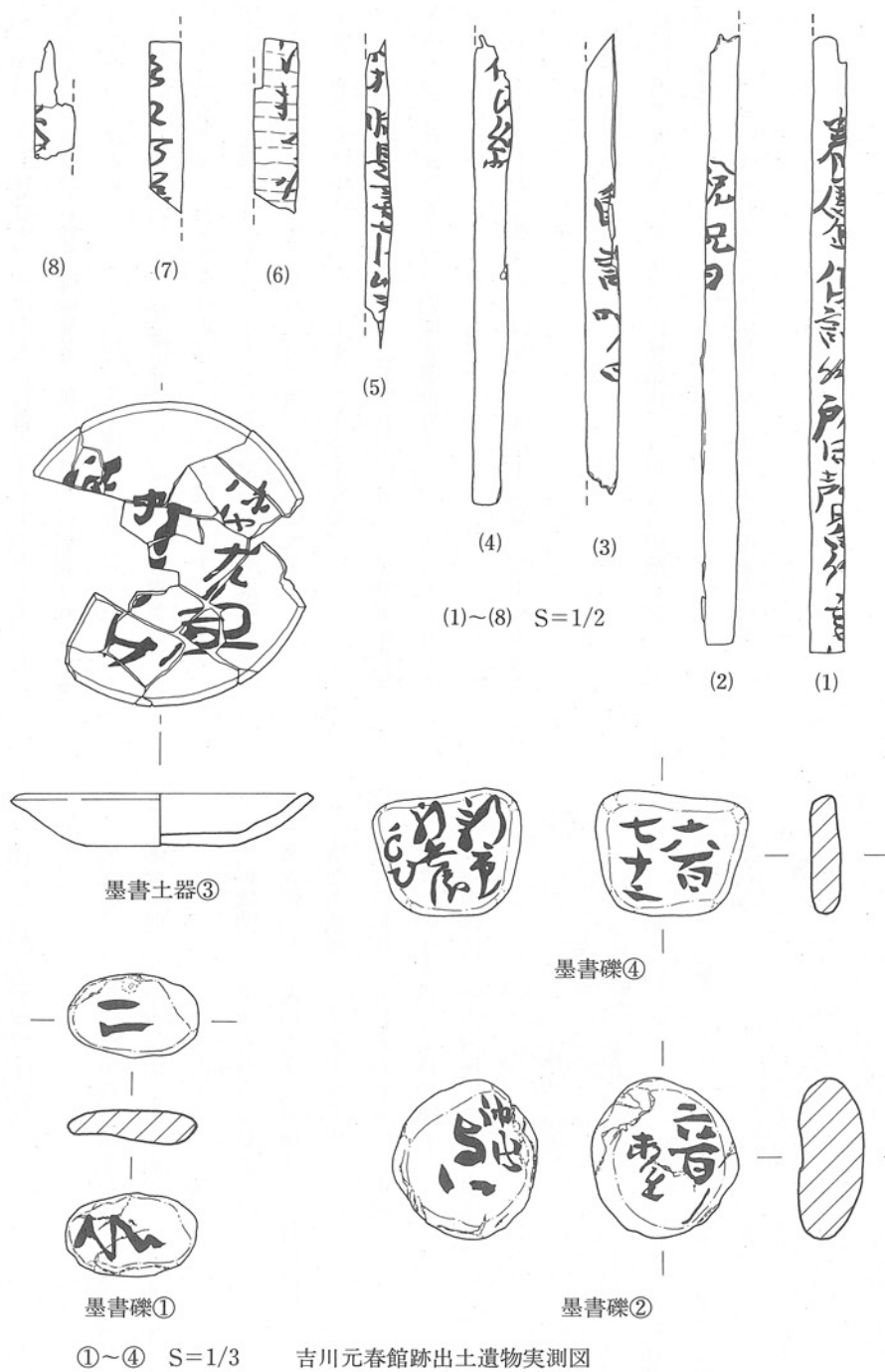
このほか文字資料として、SE二一四底部の堆積土より、①片面に「☐」、他面に「久」、②片面に「六百ノ^{【未進カ】}☐」、他面に「☐^{【よいか】}」と記した墨書礫二点、また、SE二一四の西方から③「☐左衛門(花押)ノ^{【よいか】}☐けノ^{【未進カ】}☐」と底内に墨書した土師質土器皿一点が出土し、石組井戸SE二〇一より、④片面に「六百ノ七十二」、他面に「新市ノノ新兵衛ノ己巳」と記した墨書礫一点が出土している。①はそれぞれの面の文字を書いた方向が異なる。②の裏面は地名十名前と思われる。④の「新市ノ新兵衛」は地名十名前

と考えられるが、新市がどこにあたるかは不明である。また、「己巳」が新兵衛の生年であるとすれば、永正六年(一五〇九)か永禄一二年(一五六九)となる。

8 木簡の釈文・内容

- | | | |
|-----|--|---------------------|
| (1) | 眷属 <input type="checkbox"/> ^{【俱詣仏】} <input type="checkbox"/> ^{【同】} <input type="checkbox"/> ^{【白仏カ】} <input type="checkbox"/> ^{【言】} | (164)×(8.5)×0.6 081 |
| (2) | <input type="checkbox"/> ^{【説呪曰】} <input type="checkbox"/> ^{【説呪曰】} | (162)×(8.5)×0.6 081 |
| (3) | <input type="checkbox"/> ^{【即説呪曰】} <input type="checkbox"/> ^{【即説呪曰】} | (122)×(8.0)×0.7 081 |
| (4) | <input type="checkbox"/> ^{【揖減】} <input type="checkbox"/> ^{【以】} <input type="checkbox"/> ^{【是菩薩】} | (122)×(8.0)×0.7 081 |
| (5) | <input type="checkbox"/> ^{【揖減】} <input type="checkbox"/> ^{【以】} <input type="checkbox"/> ^{【是菩薩】} | (80)×(7.0)×0.7 081 |
| (6) | <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> | (44)×(11.5)×0.5 081 |
| (7) | <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> | (45)×(8.0)×0.2 081 |
| (8) | <input type="checkbox"/> | (31)×(10.0)×0.2 081 |

柿経を『妙法蓮華経』の文言とつきあわせ、文字の推定を行なってみる(第一次調査で出土した柿経、千代田町教委が一九九六年度に行なった吉川元春館跡の北東方の万徳院跡から出土した版本は、『妙法蓮華経』)。①は「陀羅尼品 第二十六」に記載されている「眷属俱詣仏所同声白仏言」に類するものと思われる。眷属と俱との間に一文字入る。



上部が焼け焦げている。上端、右半分を欠失。

(2)は(3)の二文字目以降の右側の文言に符合するものと考えられ、『陀羅尼品』及び『普賢菩薩勸發品 第二十八』に記載されている「説呪曰」と思われる。「即説呪曰」が『陀羅尼品』には三カ所あり、「即於佛前而説呪曰」が『陀羅尼品』に二カ所、『普賢菩薩勸發品』に一カ所ある。上部が焼け焦げている。上端、左半分を欠失。

(3)は(2)の左側の文言に符合するものと考えられ、「即説呪曰」であろう。下部が焼け焦げている。上下端、右半分を欠失。

(4)は上部が焼け焦げている。上端、右半分を欠失。

(5)『妙音菩薩品 第二十四』に記載されている「…於神通變化智慧無所損減是菩薩以若干智慧明照娑婆世界…」の一部であろう。上部が焼け焦げている。上下端、右半分を欠失。

(6)は文字不明で焼け焦げはない。(6)は上下端、右半分を欠失。

(7)・(8)は上下端、左半分を欠失。

9 関係文献

広島県教育委員会『史跡吉川氏城館跡 吉川元春館跡—第一次発掘調査概要—』(一九九六年)

同『史跡吉川氏城館跡 吉川元春館跡—第二次発掘調査概要—』

(一九九七年)

(沢元保夫)

山口・長登銅山跡

ながのぼり

1 所在地 山口県美祿郡美東町大字長登字大切

2 調査期間 第三期第一次調査 一九九六年(平8)八月～

一九九七年三月、補足調査 一九九七年六月

3 発掘機関 美東町教育委員会

4 調査担当者 池田善文・森田孝一・神田高宏

5 遺跡の種類 古代銅生産官衙

6 遺跡の年代 八世紀初頭～一世紀

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

長登銅山跡は、秋吉台国定公園の東南麓に位置する。銅山の採掘



(山口)

は、古代、中世から江戸前期、明治から昭和と三期の全盛時代があり、これにかかる大小の採鉱、製錬の遺跡が、約六〇haの中に約二四カ所点在しており、鉱山史研究に格好の遺跡である。このうち、長登集落の西方に所在する大切谷一帯が